

日本小児科医会結成10周年に想う

日本小児科医会会長 内藤壽七郎

日本小児科医会が結成10周年を迎えようとしている。当初事務所として窓1つない部屋を借り、第一線診療で多忙を極めている方々に常任理事をお願いしたところ、ボランティアそのものの気持ちでそれぞれ担当の仕事をやった上、年3回を下らない常任理事会では、遠方からもほとんど毎回無欠席で、弁当を食べる時間も惜しみながら意見交換をして貰っている。

10年という間には、手違いで迷惑を掛けたこともあったが、会員の理解と寛容で了承して貰ったこともあった。殊に最初に定められた会費の改正は再度に互ったことはご承知の通りである。

法人化は本会結成の時からのご願であったが、それには安定した会の運用費用が第一条件であった。これまで、各都道府県医会の連合体であったのを、個人加入にして、直接会費徴収をするとか、定款を充実させるとか、自前の事務所や規定の事務員、その他いろいろの条件がある。

再度会費の改正をお願いする段になって、今までの会員数約6,500人が大幅な減少をするのではと危惧された。しかし、その結果は以前と大差なかったばかりか、数県においては以前よりも会員数が増加していた。

このことは執行部にとっては大きな励ましであった。

日本小児科医会の会員の大多数の方々は、会の結成後間もないころ、バキスタン地方の暴風雨の水害で気の毒な子供達のため義援金をお願いしたのに対して、1カ月以内の短期間に600数10万円に達する額となって、早速金額を日本ユニセフ協会に届けたし、今回、ラオスの子供のポリオ撲滅のために募金をお願いしたところ、第1回分として1千万円近くの額に達した。このような善意に満ちた会員の方々が、同じ時間診療しても他科の1/3にしか評価されないのである。こんなことがいつまでも許されてはならない。関係方面と折衝しても任意団体では効果が挙がり難い。法人化の条件がほぼ整った今こそその実現に6,000会員と共に全力を挙げて邁進す可きであるまいか。子供そして小児科医を重視しない国はやがて力を失い滅亡するであろうこと申すまでもないことと言いたい。